
シルバーガンナー

志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバーガンナー

【Zコード】

Z5583C

【作者名】

志貴

【あらすじ】

原種といわれる化け物が住み着く、この大陸の一部の国で史上例のない巨大武装集団によつてホテルジャックが起きた。そこに居合わせた凄腕の用兵アルフが、ホテルを開放するため動き出す。

第一話・ホテルジャック編1

「「」注文は

「茶でいい

酒の匂いが充満しているこのバーで、なんとも場違いな注文が飛び。しかし、バーに来るのは人々が多種多様なのかその注文に「かしこまりました」と、表情一つ変えず、悪態もかかず、なんとも律儀にお茶を出す。

プロのなせる業だろ。」

「ブロンド茶でよろしくでしょ。」

「一服できればそれでいいよ」

正直疲れたからか、と銀色の髪の上から頭を搔きながら茶を一氣で飲みほす。

たははーと笑う男は大体二十歳前後で、俗に言つ美青年といつてがその顔から判別できる。

ただ、今日意外だと明らかに違和感丸出しなのは、彼が身に包んでいる戦闘服だ。

男は大きくあくびを搔いて、バーテンダーに茶のおかわりを要求する。バーテンダーは苦笑しつつ、グラスに茶を注いだ。

「ずいぶんお疲れのようですね。もしかして民間軍事用兵派遣会社の方ですか?」

「あ、判る？ 実は早朝から此處の番をやつてて、今が休憩中～」

「それは『』苦労様です」

男はカウンターに頬杖をついて、瞼は閉じかけ、今にも眠つてしまいそうだ。緊張感も何もない仕草だが、ネシヨナリー・サービス民間軍事用兵派遣会社とはこの国、エグニアにおいて最も死亡率が高い、スリルに満ちた職だ。厄介エクセントリックことが多いこの国の警察政府は慢性的な人手不足に悩まされており、彼らはいわばなんでも屋として、多数のネシヨナリー・サービス民間軍事用兵派遣会社ビスと契約している。しかし、なんでも屋なので依頼は国からだけではない。民間企業や個人的依頼なども引き受けている。

今回もそれだ。

なんでもこの高級ホテルに、多数の有権者たちが参堂しているらしい。ここをテロ組織などに狙われたらひとたまりもない。よつて彼らは民間軍事用兵派遣会社を雇い、ここに護衛を任せているのだ。

「では疲れが取れ、さらに眠気も覚ます、このバーの名物を出しますか？」

バーテンダーは笑みを絶やさないまま問い合わせる。

プロの業だなー。

「そんないいモンがあるならもつと早く出してくれよ」

男は楽しそうに満面の笑が広がり、うなずいたバーテンダーが手馴れたように手早く、背後の棚からジョッキを取り出す。すばやく栓をあけ、グラスに紫の液体を注ぐ。

「お待たせしました。当カクテルバー名物、レオジル檸檬酒で『』ぞこます」

「俺、酒はちよつと . . .」

男は不満そうにほほを引きつつ、その液体を訝しげに見つめる。

「大丈夫です。少々アルコールは入っていますがお酒と言えるほどではありません。ジューース感覚で飲んでいただければ結構ですよ」

温かみを帯びた口調で答えるバーテンダー。男は暫くグラスの中の液体を見つめていたが、意を決して、ちょこっとだけ飲む。

「お、うまいじゃん」

予想以上の飲みやすさに男は満足して、バーテンダーに笑いかける。

「さ、ぢつやぢつや。これは一気飲みするのが作法です」

手拍子を始めるバーテンダー。男はバーテンダーのノリのよさに嬉しそうに苦笑いする。

男がグラスを斜めに傾けようとした時だった。

ドアが荒々しく蹴り破られ、問答無用で短・機関銃サブ・マシンガンを乱射してきた男どもが約五人。咆哮を上げながら飛び交う弾丸。煙と部屋の破片を撒き散らせながら連射は続く。

「あぶねつー！」

銀髪の男はバー・テンドーを庇いながら、カウンターの下に身を隠す。唐突に銃声が止む。男はそれから数秒待つた後、静かにカウンターから目の高さまで頭を出す。

硝煙と火薬のにおいが部屋に充满している。

少々煙つているが、どうにか見える範囲だらう。

「」いや、ひでーな」

中にはただの民間人もいたのだろう。だが、多数は自分と同じ休憩を取つていたタクティクター（ネショナリー・サービス軍事用兵派遣会社から派遣される用兵のこと）だったはずだ。そのタクティクターが、不意打ちとはいえ、ほとんどが鮮血で床を染めながらうつづぶしている戦闘不能状態だ。おそらく反撃も許してはくれなかつたのだろう。

「全員動くな！」

ドスが利かせ怒鳴つてゐる男に、もう殆ど動けるやつなんていねーよ、と舌打ち混じりの毒を吐きながら立ち上がりうとして、先ほどのバーテンダーに服を引っ張られる。

「あなた一人でどうするつもりですか？」

そのようなことを聞くバーテンダーの顔には、動搖の一文字は欠片もない。

「先ほど、政府に応援を依頼しました。援護が来るまで待機するのが得策だと思います」

あくまで冷静なバーテンダー。もしかしたら、今はバーテンダーをやつてゐるが昔は相当な修羅場をくぐってきたのかもしれない。普通はバーテンダーの言う通り、待機するのがベストだらう。だが

「大丈夫だ、五人程度なら俺一人で十分」

言い終えると同時にカウンターを飛び越え、男達に弾ける様に疾駆する。その動きは瞬きを許さないほどに早い。両太股に下げるホールスターに納まっている自動大型拳銃を抜き、放つ。

「！？」

男達は咄嗟のこと驚きながらもそれに照準を合わせる。だが銀髪の男がそれを許さない。男どものサブ・マシンガンをすばやく打ち落とし、その間に間合いを詰める。

男の一人に顔面を銃身でたたきつる。「コキッ、」という生々しい音と共に、他の男がこちらに銃を発砲。それを先ほど鼻を折つてやつた男の体を盾にして防ぎ、弾が飛んできた方に蹴り飛ばす。そして間を空けず右側に転げるよう飛び込む。シュンッ、と先程まで自分が立っていた空間に刃が駆け抜けた。サブ・マシンガンを弾かれた男が持っていたのだろう超振動刃^{バイブレード}で、体勢が崩れている自分にそれを振り下ろそうとする。銀髪の男は床に手を付き、その体勢のまま超振動刃^{バイブレード}を振り下ろしてきた男の手首を蹴り飛ばす。一瞬何が起こつたか解らない様な顔をして超振動刃を取りこぼした男に、容赦なく躊躇いなくその胸板に弾丸をお見舞いする。そして後転。銃声と共に床に残る弾痕。銀髪の男は咄嗟に避けたが、まだ銃撃は終わっていない。全自动連射^{フルオート}で男の命を奪いにかかるうとする。チッ。舌打ちをしながら素早く転がりながら、男に発砲する。銃声が止んだ。

はあ、と息を整えながら、まだ息があるそいつに歩み寄る。
鼻を折られ、仰向けに倒れている男は覚醒したのかまぶたをゆっくりと開ける。

鼻から血が流れ、無様な男は仰向けになつたまま銀髪の男の瘦せ細つた長身を見上げる。

「お前、 . . . 何者だ」

「それは」ひちの台詞だよ。お前ら何がしたいんだ？」

さらに相手の意図を問い合わせようと近寄り「としたら、突然に蹴りが入つてくる。それを後方にステップをして回避しながら、少しあ炎を据える目的で、一発、二発、三発、四発と射撃し、急所をはずして相手の胴体を捕らえたはずだつた。相手が常人であつたならば、すさまじく床を転がつて距離をとつた戦闘員の男は、こちらを睨み付けたまま不敵な笑みを浮かべてこいる。

「人間のぐせに つけあがるなよ」

戦闘員の男は戦闘用短剣バトル・ダガーを引き抜き、こちらに突進してきた。まるで閃光のような突進を銀髪の男は、その顔にブローを食らわし無慈悲にノックアウトする。戦闘員の男が持っていたダガーが、むなし音を響かせながら床に落ちる。ついでに男の歯が何本も。

「てめえ 一人で俺が倒せるかつての」

格好つけたような発言をする。その割りに、恐る恐る相手に近づいた男は、油断なく銃を構えたまま足先でちょんちょんと相手の体をつつく。どうやら完全に逝つてしまつてしまつたようだが、男の表情は引き締まつたままだ。

絶え間ない銃声は店外からも響き渡つてこいる。

「ちょっと騒がしすぎるだろ、これ」

男は、倒れた戦闘員の男がヘッドホン型のイヤホンとマイクを身に着けているのを目に留めて、無線機ワイヤレスと剥ぎ取つて耳に当てる。

「第十一分隊、フロアー16大食堂を確保！」

「第十五分隊、フロア一屋上展望台制圧完了！」

「第八分隊、フロアー2大広間苦戦中であります。応援を!」

第七分隊、了解！」

第三分隊「了解！」

怒涛のような通信の嵐を聞いて、男の顔がいちだんと引きつる。

「おじおじ、どれだけいんだよ。ここからマジでホテルジャックする気か？」

思わず呻いてしまったとき、無線から怒鳴り声が漏れた。

「おい！ カフェ・バーはどうなつている。応答しろ！」

「はつ！ 制圧完了しました！」

「貴様だれだ！」

「…ひまわせ！」

咄嗟に先程の男の真似をしてみたが、どうやら通じなかつたようだ。似てるとも思えなかつたが。無線を投げ捨て、バーテンダーのほう

「もうすぐ敵さんが来るとと思うから、あんたは死んだ振りでもして
いてくれ。間違つても抵抗するなよー」

「わかりました。熊も騙されるほど私の演技力をお待ちしていく
ださい」

ほんとにノリがいいな、このバーテンダー。

「期待してるぜじゃあな

男が店を出ようとしたとき「お持ちください」と、バーテンダーに呼び止められた。

「あなたの名前を聞いてもよろしいでしょうか?」

笑みを絶やさないまま、バーテンダーが問いかける。名前ぐらには教えても減るものではない。

「アルフだ。アルフ・ミコリーク」

「それではアルフ殿、御武運を」

バーテンダーが神妙に答えたとき、アルフはすでに音もなく店外に消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5583c/>

シルバーガンナー

2010年11月2日14時35分発行